令和7年度　家庭部会研究計画

１　研　究　主　題

自らよりよい生活を創り出そうとする子供の育成

－学びの質を高める家庭科の学習の実現に向けて－

２　研究主題設定の理由

現代は予測困難な時代（VUCA）と言われ、加速度的に変化する社会において、子供たちには社会の急激な変化に主体的に対応する力を身に付けることが求められている。こうした中、学校教育においては、令和３年中央教育審議会答申で示されている「令和の日本型学校教育」の構築を目指した「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」に向けた取組や、令和５年の「教育振興基本計画」における「持続可能な社会の創り手の育成」及び「日本社会に根ざしたウェルビーイングの向上」といった２つのコンセプトの相互循環的な実現に向けた取組が進められなくてはならない。これらのことから、子供たちが学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解するとともに、変化に対応し、新たな価値を創造できる力を身に付け、生涯にわたってよりよく学び続けることができるようにするために、学びの質を一層高める授業改善を進めていくことが必要である。

家庭科においては、生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、家族や家庭生活、衣食住の生活、消費生活や環境などについての科学的な理解を図り、それらに係る技能を身に付けることや、日常生活から問題を見いだして課題を設定し、様々な解決方法を考え、実践を評価・改善し、考えたことを表現するなど、課題を解決する力、よりよい生活の実現に向けて生活を工夫しようとする態度等を育成することを目指している。本県の子供たちは、令和４年度に実施したアンケート調査の結果から日常生活の中から問題を見いだして課題を設定することや多様な他者と関わり、自分の考えを深めたり、発表したりすることに課題があることが明確になった。これらを踏まえ、家庭科で身に付けた資質・能力を家庭、地域から最終的に社会へとつなげ、社会を生き抜く力や多様な他者と協働しながらともに学び続ける力を育成していくことが大切であると考え、研究主題を「自らよりよい生活を創り出そうとする子供の育成」とし、副主題を「学びの質を高める家庭科の学習の実現に向けて」と設定した。

３　研究主題・副主題について

(1)　「自らよりよい生活を創り出そうとする子供」とは

「自らよりよい生活を創り出そうとする子供」とは、次のような資質・能力を身に付けている子供であると考えた。第一は、家庭科で習得する日常生活に必要な知識が既存の知識や生活経験と結び付けられ、学習内容の本質を深く理解したり、主体的にそれらに係る技能を活用したりする子供のことである。第二は、日常生活の中から問題を見いだして課題を設定し、様々な解決方法を考え、実践を評価・改善し、考えたことを表現できる子供のことである。第三は、家族や地域の人々との関わりを考え、家族の一員として主体的に生活を工夫し実践しようとしている子供のことである。

自らよりよい生活を創り出そうとすることは、日常生活に特に不便や不十分さを感じることなく過ごしている子供たちにとって容易ではない。そこで、既習の知識及び技能や実物、体験、調査、資料などを活用して、自分の日常生活を改めて見つめることができるようにする。そうすることで、子供たちに「なぜそれをするのか」「なぜそのような方法で行っているのか」という疑問や「こうしたい」「こうなりたい」という思いや願いが生まれ、日常生活の中から問題を見いだして課題を設定できるようにする。子供たちにとって必要感のある課題を設定することは、学習意欲の高まりや見通しのある学習につながると考える。問題解決的な学習を充実させることで、課題を解決できた達成感や、実践する喜びを味わい、次の学習に主体的に取り組むことができる。２学年間を見通して、このような学習過程を工夫した題材を計画的に配列し、課題を解決する力を養うことが大切である。そ

して、家庭科の学習で身に付けたこれらの資質・能力を活用し、家庭生活を大切にする心情を育むとともに、家族や地域の人々と関わり、家庭生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度を養う。このことは「日本社会に根ざしたウェルビーイングの向上」「持続可能な社会の創り手の育成」にもつながり、生涯にわたって自らよりよい生活を創り出そうとする意欲や態度へとつながると考える。

⑵ 「学びの質を高める家庭科の学習」とは

「学びの質を高める家庭科の学習」は、教師がその題材で育成する資質・能力を明確にし、学習内容や時間のまとまりを見通した学習過程を具体的に構想すること、育成を目指す資質･能力が発揮される子供の姿や場面を想定しながら、学習評価の場面を工夫し、振り返りを行うことで実現すると考える。さらには「個別最適な学び」と「協働的な学び」を充実することによって「主体的･対話的で深い学び」を実現する必要がある。子供自身がどのような課題を設定して、どのように解決に向かっていくのか、その学習過程を子供自身が決めていくことで、自ら学習を調整したり、多様な他者と対話することにより学びを深めたりという、他者と関わり、自分の考えを深めたり、表現したりしながら課題を解決する力を育む授業である。学びの質を高める過程では、子供たちが家庭科の「見方・考え方」である「協力・協働」「健康・快適・安全」「生活文化の継承・創造」「持続可能な社会の構築」の視点を働かせることができるように留意する。

４ 研 究 内 容

⑴ 指導計画の工夫

① ２学年間を見通した年間指導計画

２学年間の学習の見通しをもち、子供や学校、地域の実態に応じて家庭科で育みたい子供の姿を明確にする。家庭科の学習内容や他教科等との関連を明確にし、さらに、中学校の技術・家庭科（家庭分野）とのつながりを意識し、指導できるよう、教科等横断的な視点で題材配列や題材構成を工夫した年間指導計画を作成する。

題材構成については、育成する資質・能力を明確にし、その育成を図ることができるように、関連する内容の組み合わせを工夫したり、学習過程との関連を図ったりする。内容「A家族・家庭生活」から、内容「C消費生活・環境」までの各項目や指導事項の相互の関連を図ったり、内容AからCまでの各項目で身に付けた「知識及び技能」を活用し「思考力・判断力・表現力等」を育み、家庭や地域での実践につなげることができるよう一連の学習過程に位置付けたりする。

題材配列については、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に定着させるために、例えば、内容「B衣食住の生活」⑵「調理の基礎」及び⑸「生活を豊かにするための布を用いた製作」について、２学年間にわたって扱うようにする。その際、簡単なものから複雑なものへと次第に発展していくよう配列する。そして、内容「A家族・家庭生活」の⑷「家族・家庭生活についての課題と実践」では、「⑵家庭生活と仕事」又は「⑶家族や地域の人々との関わり」を基礎とし「B衣食住の生活」「C消費生活・環境」で学習した内容との関連を図り２学年間で一つ又は二つの課題を設定し、家庭や地域での実践力を育成する。さらに、学校行事や地域の行事、家庭実践等との関連も考え、題材配列や題材構成を工夫した年間指導計画を作成することで、学びの質の向上が図られ、確実に家庭科で育てたい資質・能力が育まれていくと考える。

② 家庭・地域との連携を図った教材の開発や人材の活用

家庭科の学習を通して身に付ける知識及び技能などは、繰り返して学習したり日常生活で活用したりして定着を図ることができる。学習したことを家庭生活に生かし、継続的に実践できるようにするためには、家庭との連携が大切である。家庭でのインタビューやアンケート調査、実践活動は、家庭における新たな問題発見を促し、子供が日常生活での新たな課題をもつことにつながる。その課題を解決していく中で、家族の一員として自分が成長していることの自覚が生まれ、家庭生活を大切にしようとする意欲や態度が育まれる。さらに、家庭科の学習のねらいや内容について家庭に情報を提供し、家庭科の学習の意義について理解を深めるために、家庭科通信や実践カードなどを工夫し、家族の協力のもと、効果的に学習を進めることができるようにする。さらに、幼児又は低学年の児童や高齢者など異なる世代の人々と関わる活動等も考えられることから、教育活動に必要な人的又は物的な支援体制を地域の人々の協力を得ながら整えるなど、地域との連携を図る必要がある。例えば、生活

文化の大切さを伝える活動などにおいては、地域の高齢者をゲストティーチャーとし、生活の工夫について調べたり、教わったりすることが考えられる。総合的な学習の時間や学校行事、地域の行事等との関連を図った取組に、家庭科で学んだことが生かせる実践活動を設定し、交流活動をすることも考えられる。

⑵「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を進めるに当たり、学びの深まりの鍵となるのが「見方・考え方」である。家庭科においては「生活の営みに係る見方・考え方」について、内容「A家族・家庭生活」の⑴のガイダンスで扱う。例えば「食事の役割」では「健康」、「衣服の主な働き」では「快適」などの視点を働かせることができるように学習を展開する。「課題」は、導入の生活の課題発見（とらえる）場面において設定する。例えば、子供の実態から「１食分の献立を立てよう」の題材では「健康で元気になるにはどのような食事をとればよいか」という「課題」を設定する。子供たちは、その課題解決のために「生活の営みに係る見方・考え方」である「健康」の視点から日常生活を見つめ、問題を見いだす。その問題を解決するために、個人やグループで課題を設定し、様々な解決方法を考え、計画を立て実践し、その結果を評価・改善し、家庭や地域で実践する。このような一連の学習過程の中で、子供たちは自分の生活経験や学んだ知識（事実的な知識）を関連付けて考え、理解を深めていく。その過程で、本質的な「健康」という概念が習得され質的に高まったり、技能が定着したりする。

①　衣食住などに関する実践的・体験的な活動の充実

題材ごとに、発達段階に応じた基礎的・基本的な知識及び技能を明確にする。子供たちには、試行錯誤する活動や観察、調査、実験等の活動を通して実感を伴って理解できるよう工夫する。また、調理や製作等の手順の根拠について考えることにより、科学的な理解にもつなげる。例えば、みそ汁の調理で「なぜ材料をこの順番で入れるのだろう」ということを、実習を通して理解し、他の材料や料理に応用できるようにする。ボタンの付け方では、ボタンと布の間に２～３回糸を巻くのはなぜか比較できるような教材を活用し理解できるようにする。

このような実践的･体験的な活動を通して、確かな知識及び技能の習得を図る。その際には、子供の特性や生活体験を把握し、ティームティーチングや少人数指導を取り入れ学習形態を工夫したり、支援体制を整えたりして、より個に応じた指導の充実を図る。このような実践的・体験的な活動によって、全ての子供たちの可能性を引き出す「個別最適な学び」の実現にもつながると考える。

②　問題解決的な学習過程の工夫　　※家庭科の学習過程の参考例（小学校学習指導要領　解説　家庭編　参照）

とらえる	見通す		確かめる	振り返る		生かす
生活の課題発見	解決方法の検討と計画		課題解決に向けた実践活動	実践活動の評価・改善		家庭・地域での実践
既習の知識及び技能や生活経験を基に生活を見つめ、生活の中から問題を見いだし、解決すべき課題を設定する	生活に関わる知識及び技能を習得し、解決方法を検討する	解決の見通しをもち、計画を立てる	生活に関わる知識及び技能を活用して、調理・製作等の実習や、調査、交流活動などを行う	実践した結果を評価する	結果を発表し、改善策を検討する	改善策を家庭・地域で実践する

上記の学習過程は例示であり、題材ごとに学びの質を高めることができるよう学習過程を設定する。本県の小学校教育研究会家庭部会では、習得･活用･探究という学習過程を「とらえる」「見通す」「確かめる」「振り返る」「生かす」という言葉で表している。子供にとっての現状から問題を見いだして、よりよい生活に向けての課題を設定する。題材を構想する際には、カリキュラム・マネジメントの視点やICT活用の場面等を想定し「主体的･対話的で深い学び」の授業の実現に向けて、学びの質を高めることができるよう工夫する。これにより、子供たちに「何をどのように学ばせるか」「何ができるようになるか」が明確になり、家庭科における資質・能力の育成を図ることができると考える。

③　言語活動の充実

調理や製作等における体験を通して、言語活動を充実させることができるようにする。例えば、課題解決に向けての実践活動では、試行錯誤する活動や実験・実習等を協働して行い、その結果をグループで話し合うことに

より、自分の考えと友達の考えの共通点や相違点を見付け、より深く考える。家庭科で用いる生活に関連の深い様々な言葉が、実感を伴った明確な概念として形作られるように配慮する。このような活動を通して、身近な生活への理解が深まるとともに、学んだことを活用する能力を身に付けることができ、生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度を育むことができる。

④　ねらいを達成するための ICT の効果的な活用

自分やグループの考えを言葉や図表等にまとめて共有し、互いの考えを可視化して比較できるよう工夫したり、実践の結果をまとめて発表したりする際に ICT 機器を活用する。また、製作物の見本、段階見本、試行用の教材等 ICT を活用した教材・教具を子供が活用できるように学習環境を整備する。例えば、学習効果を高めるために、グループで包丁の使い方をタブレット端末で撮影し合い、繰り返し再現するなどして使い方を振り返り、技能の定着を図るなどの実践が考えられる。

⑤　「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図る

言語活動の充実、ICT の効果的な活用等を通し「個別最適な学び」と、様々な考えが組み合わさりよりよい学びを生み出す「協働的な学び」の一体的な充実を図る。「協働的な学び」は、子供一人一人のよさや可能性を生かし、異なる考え方を組み合わせ、よりよい学びが生み出されるようにする。

⑶　学習評価の工夫

①　資質・能力を育むための「題材構想及び指導と評価の計画」の作成

子供が考えることと教師が教えることを整理して学習を「とらえる・見通す・確かめる・振り返る・生かす」の一連の学習過程を子供の姿で考え、実現を図っていくために題材構想を組み立てる。それをもとに子供一人一人に確実に資質・能力を育むことができるよう「本題材で育てたい資質・能力」を明確にして、学習活動に沿った評価規準や評価方法を明記した「題材構想及び指導と評価の計画」を作成する。ただし、必要があれば、子供の学びの姿から計画を修正することも重要である。

②　学習状況について評価する時期や場面の精選

日々の授業の中で、子供の学習状況を適宜把握して、指導や支援に生かすことにつなげられるよう評価時期や場面、評価方法等については「指導と評価の計画」を立てる段階で位置付ける。例えば、同じ内容項目で２回評価を行う場合、１回目を「指導に生かす評価」とし、２回目を「記録に残す評価」とする。評価する時期や場面においては毎回の授業ではなく、内容や時間のまとまりごとに、それぞれの実現状況を把握できる段階で行うなど、その場面を精選し、指導と評価の一体化に向けて取り組んでいく。「指導に生かす評価」の場面で、努力を要する状況と判断される子供には、具体的な手立てを講じ、学習指導要領に明記されている内容が全ての子供に身に付くようにする。

③　自己の変容を実感できる評価方法の工夫･改善

評価の三つの観点において学習活動に即して、評価場面や評価方法を明確にし、総括的な評価だけでなく、形成的な評価を行う。学習の成果を適切な場面で評価し、子供自身が自己の変容を実感できるようにする。例えば「知識・技能」では、事実的な知識の習得と概念的な理解をテストやワークシート、作品等から評価する。「思考・判断・表現」では、論述やレポートの作成、調理や製作計画・実践記録表、グループでの話合い等から評価する。「主体的に学習に取り組む態度」では、ノートやレポート等における記述、学習前後の比較ができるようなワークシートやポートフォリオ、行動観察等から評価する。さらに題材全体を通して、自ら学習を調整する力が育まれたかを見取るために、振り返りシートを作成する。子供自身が毎時間、学習後に振り返ったり、題材を学習する前と学習した後で、できるようになったことを自己評価したりと自分の学びを自覚していくことで、学びの質が高まると考える。これにより、子供たちは学習への見通しをもつことができ、学習前後の自己の成長を実感し、自信をもって次時への課題解決に向けて取り組むことができる。また、教師は、振り返りシートを通して子供が実現している学習の状況を的確に捉えることができ、授業改善に生かすことができる。